

ヘーゲル『精神現象学』 「序説」 第20節～第22節の解明

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

2015-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012275>

ヘーゲル『精神現象学』「序説」

第20節～第22節の解明

山 口 誠 一

凡 例

1. 原文の隔自体は、本論稿ではイタリック体で表記し、訳文では傍点を付した。
2. 『精神現象学』初版の行文で第二版刊行に際した推敲された箇所は、本論稿原文直下に表示した。

《第20節》

【要旨】

真なるものは全体である。実在が自己展開して完成すると全体となる。絶対者は結果である。絶対者の本性は主体である。結果としての絶対者という外観の矛盾は解消される。絶対者は最初直接には一般的なものにすぎない。ひとつの言葉の言表は、そのなかにふくまれていることを語らない。言葉が表現するのは直接的直観である。言葉が命題になることは他者化である。媒介とは、他のものとなることを取り返すことである。媒介と絶対的認識は相容れないと思われる。

(1) 真なるものは全体である。

Das Wahre ist das Ganze.

真なるものは全体である。

《註解》 真なるものとしての全体とは、主体としての体系の説明である。なぜならば、ヘーゲルの洞察によれば、真なるものとは、主体であり、その最後の姿は学の体系だからである。その体系が全体と呼ばれるのは、体系の最初の部分命題が種子のようになって一本の樹木のように体系が生長するからである。

(2) 実在が自己展開して完成すると全体となる。

Das Ganze aber ist nur das durch seine Entwicklung sich vollendende Wesen.

ところで全体とは、自分を展開することによって自分を完成してゆく実在にほかならない。

《註解》 ここから、真理としての全体が①自己展開②自己完結③実在ないし実体という三つの要素から成立していることが判明する。したがって、真理の認識は、全体的であって、一面的であってはなら

ないということは、実在の以上の性格から導出されるのである。

(3) 絶対者は結果である。

Es ist von dem Absoluten zu sagen, daß es wesentlich *Resultat*, daß es erst am *Ende* das ist, was es in Wahrheit ist;

絶対者については、それは本質的に結果であり、終わりにおいてはじめて、それが真にあるところのものになるといわなければならない。

《註解》 これは、主体が体系的真理であるときの姿である。

(4) 絶対者の本性は主体である。

und hierin eben besteht seine Natur, Wirkliches, Subjekt oder Sichselbstwerden zu sein.

1 Sichselbstwerden] sich selbst Werden

そして、現実的なものであり、主体であり、自己自身への生成であるという、絶対者の本性は、まさにこのことにおいて成り立つ。

《註解》 絶対者の本性は、主体であるが、とりわけ現実的なものであり、自己自身への生成である。主体は、否定性の力であり、他者への生成としての否定性であり、最後に現実的なものなのである。

(5) 結果としての絶対者という外観の矛盾は解消される。

So widersprechend es scheinen mag, daß das Absolute wesentlich als Resultat zu begreifen sei, so stellt doch eine geringe Überlegung diesen Schein von Widerspruch zurecht.

絶対者が本質的に結果として概念把握されるべきだというのは、いかにも矛盾したかのようにみえようが、少し考察すれば、矛盾とみえるこの外観は修正される。

《註解》 ここで、「少し考察すれば」といわれる場合の少しの考察とは、以下のことである。真なるものが全体であり、絶対者が真なるものであれば、結論として絶対者が全体であることになる。ところで、「全体とは、自分を展開することによって自分を完成してゆく実在」なのであり、それは生成の結果なのである。こうして、絶対者は結果となる。たしかに、絶対者は、生成という相対者から結果として実現されるとなると絶対者と相対者との矛盾の外観が生ずる。しかし、絶対者を全体的完成と解釈するかぎりでは完成への生成が不可欠となる。

(6) 絶対者は最初直接には一般的なものにすぎない。

Der Anfang, das Prinzip oder das Absolute, wie es zuerst und unmittelbar ausgesprochen wird, ist nur das Allgemeine.

端初、原理あるいは絶対者は、それが最初に直接に語られる相では、一般的なものであるにすぎない。

《註解》 絶対者は、端初あるいは原理と言い換えられているが、この二つの言葉は、ともにギリシア

語ではアルケーとしての始まりを意味する。ヘーゲルは、特殊を含んだ具体的普遍としての絶対者の体系を実現しようとするので、ここでの一般的なものととは、抽象的普遍である。それは、命題の主語としての絶対者なのである。この点については、「序説」《第23節》で詳述されている。そして、つづく《第24節》では、フィヒテやシェリングの根本命題で絶対的真理を表現しようとする立場が批判されている。「最初に直接に」という表現は、『精神現象学』「感性的確信」冒頭にも出てくる。

(7) ひとつの言葉の言表は、そのなかにふくまれていることを語らない。

Sowenig, wenn ich sage: *alle* Tiere, dies Wort für eine Zoologie gelten kann, ebenso fällt es auf, daß die Worte des Göttlichen, Absoluten, Ewigen usw. das nicht aussprechen, was darin enthalten ist;

わたしが「すべての動物」と言っても、この言葉が動物学であることにはなりえないのと同じように、「神的なもの」「絶対的なもの」「永遠なるもの」などの言葉が、そのなかにふくまれていることを語っているわけでないことは、まったく明らかである。

《註解》「すべての動物」という言葉の中身を語るのが動物学であることに照らせば、「絶対的なもの」という言葉の中身を語るのは、学の体系そのものである。

(8) 言葉が表現するのは直接的直観である。

—und nur solche Worte drücken in der Tat die Anschauung als das Unmittelbare aus.

—そして、直接的なものとしての直観を表現しうるのは、実際、このような言葉だけである。

《註解》ここでは、言葉は、名前として直接的直観を表現しているだけであるが、さらに記憶から出現する言葉は、後期には思惟による事象を表現する。そのような事象が心理学的にヘーゲル流に解明されているのが、『エンツュクロペディー』「知性」とりわけ「記憶」の箇所なのである。

(9) 言葉が命題になることは他者化である。

Was mehr ist als ein solches Wort, der Übergang auch nur zu einem Satze, enthält ein *Anderswerden*,

1 enthält] ist

こうした言葉より以上の内容をもつもの、かてて加えて一つの命題になることさえも、他のものとなることを含む。

《註解》言葉が命題に移行すると言葉より以上の内容となる。したがってここでの言葉とは命題の主語であり、主語を述定すると命題に移行する。そして、命題は、言葉にとって他のものなのである。ただし、この移行が、他となることを含んでいるということは、それが言葉の自己否定を意味する。

(10) 媒介とは、他のものとなることを取り返すことである。

das zurückgenommen werden muß, ist eine *Vermittlung*.

他のものとなるということは、もう一度取り戻されなければならないのであって、ひとつの媒介なのである。

《註解》 第一の自己が他のものになって終わるのではなくて、その他のものが第二の自己へ取り戻される場合に、他のものになることは、媒介となる。つまり、他のものになることが第一の自己と第二の自己とを媒介する。以下では、媒介が絶対的認識にあって不可欠あることが明らかにされる。

(11) 媒介と絶対的認識は相容れないと思われている。

Diese aber ist das, was perhorresziert wird, als ob dadurch, daß mehr aus ihr gemacht wird denn nur dies, daß sie nichts Absolutes und im Absoluten gar nicht sei, die absolute Erkenntnis aufgegeben wäre.

しかし、この媒介はつぎのようであるかのように忌避されていることなのである。つまり、媒介は絶対的なものではなくて、絶対的なものにおいてはまったく存在しないのに、それ以上のことが媒介からなされたおかげで、絶対的認識は放棄されるかのようなものである。

《註解》 ここからわかることは、シェリング流の直接知の見地は、直接性と媒介を対立させるが、ヘーゲルは、両者を対立させないのである。直接知を主語の言葉ととらえ、媒介を述語の言葉ととらえるならば、命題は絶対認識ではありえない。ヘーゲルのいう媒介知とは命題の自己運動としての体系的叙述である。

《第21節》

【要旨】

媒介を忌避する原因は媒介についての無知にある。媒介とは、①自己と同等であること、②対自的にある我、③純粹な否定性④つまり単純な生成である。媒介は生成する直接性である。反省を否定するのは理性誤認である。反省が、真なるものへの生成と結果との対立を解消する。生成も真なるものも単純である。生成とは還帰である。胎児は人間の元来ではあるが自覚化ではない。単純性としての理性にも元来と自覚化がある。理性の自覚的還帰が理性の現実化である。自覚されている自由が単純な直接性である。

(1) 媒介を忌避する原因は媒介についての無知にある。

Dies Perhorreszieren stammt aber in der Tat aus der Unbekanntschaft mit der Natur der Vermittlung und des absoluten Erkennens selbst.

しかし、媒介ということをこのように忌み嫌うのは、実は、媒介の本性も、絶対的認識そのものの本

性もよく知らないからなのである。

《註解》ヘーゲルにおいては、反省による媒介と直接性とを対立させず、絶対的認識に到る絶対的反省が考えられている。それに対して、フィヒテは、主観と客観とを統一する知的直観と主観と客観とを対立させる。そして、シェリングもそれをよく知られたこととして踏襲している。したがって、ヘーゲルからみれば、絶対的反省を認めないシェリングの立場は、媒介の本性も絶対的認識もよく知っていないことになる。

(2) 媒介とは、①自己と同等であること、②対自的にある我、③純粋な否定性④つまり単純な生成である。

Denn die Vermittlung ist nichts anderes als die sich bewegende Sichselbstgleichheit, oder sie ist die Reflexion in sich selbst, das Moment des fürsichseienden Ich, die reine Negativität oder, auf ihre reine Abstraktion herabgesetzt, das *einfache Werden*.

1 oder, auf ihre reine Abstraktion herabgesetzt] oder

媒介とは、自己を動かすことによって自己と同等であること、いいかえれば自己自身のうちに還帰すること、対自的にある我という契機、純粋な否定性である。あるいは、その否定性をまったく抽象化していえば、単純な生成である。

《註解》「自己を動かすことによって自己と同等であること」という見地は、初期シェリングにもあった。「AはAである」という絶対認識は、一方では、右項のAは、左項ではなくて右項であるかぎりBであるから「AはBである」である。他方で、そのBも、左項のAが自己を動かすことによって自己と同等となっているので A^2 とも表記されて「Aは A^2 である」となる。したがって、絶対認識は、「AはAである」という命題Ⅰと「AはBである」という命題Ⅱと「Aは A^2 である」という命題Ⅲから構成されている。ところが、命題ⅠからⅡへの移行と命題Ⅱから命題Ⅲへの移行を説明することができなかった。それに対して、ヘーゲルは、この移行の運動を「純粋の否定性」ととらえることによって、「自己を動かすことによって自己と同等であること」を「自己自身のうちに還帰すること」ととらえなおした。シェリングの幕を否定とヘーゲルは解釈することによって、自己運動を説明できたがゆえに、シェリングのとは違った生成の哲学となった。

(3) 媒介は生成する直接性である。

Das Ich oder das Werden überhaupt, dieses Vermitteln ist um seiner Einfachheit willen eben die werdende Unmittelbarkeit und das Unmittelbare selbst.

我あるいは生成一般としての媒介の働きは、それ自身としては単純なのであるから、まさに、生成する直接性であり、この意味で直接的なものそれ自身にほかならない。

《註解》このことを理解するためには、媒介が直接性としての自己への還帰でもあることに注意することが必要である。媒介とは、媒介としての自己を否定することなのであるから、生成する直接性なの

である。こういう直接性をヘーゲルは、本註解《第6節》(4)でのべているように、「ヤコービ書評」のなかで「理性の直接性」(GW15, S. 12)と呼んでいる。

(4) 反省を否定するのは理性誤認である。

— Es ist daher ein Verkennen der Vernunft, wenn die Reflexion aus dem Wahren ausgeschlossen und nicht als positives Moment des Absoluten erfaßt wird.

だから、反省を真なるものから締め出し、絶対者にとっての積極的な契機としてとらえないときには、それは理性を見誤ることになる。

《註解》 ここで反省というのは、媒介による生成のことであり、それが理性の働きであるがゆえに、絶対者の生成なのである。

(5) 反省が、真なるもののへの生成と結果との対立を解消する。

Sie ist es, die das Wahre zum Resultate macht, aber diesen Gegensatz gegen sein Werden ebenso aufhebt,

反省によって、真なるものは結果となるのであるけれども、ただしそれと同様に、結果としての真なるものと、それにいたる生成の過程との対立も、反省によって揚棄される。

《註解》 ヘーゲルの前までは、結果としての真なるものは、知的直観の所産であり、生成の過程は、反省の所産とされてきた。したがって、知的直観と反省とを統合する論理がヘーゲルの発見となった。

(6) 生成も真なるものも単純である。

denn dies Werden ist ebenso einfach und daher von der Form des Wahren, im Resultate sich als *einfach* zu zeigen, nicht verschieden;

なぜなら、この生成もまた単純であり、したがって、真なるものの形式、すなわち、結果において単純なものとして現われるという形式と、異なっていないからである。

《註解》 ここで、知的直観と反省とを統合する論理が、生成の単純性と真なるものの単純性の同一性である。そして、この単純性を創造するのが反省である。この単純性は、本節(3)で「理性の直接性」とされたものである。

(7) 生成とは還帰である。

es ist vielmehr eben dies Zurückgegangensein in die Einfachheit.

むしろ、生成ということは、こうして単純性に戻ってきていることなのである。

《註解》 「理性の直接性」とは生成であり、単純性への還帰存在なのである。つまり、生成を単純性から単純性への生成ととらえることが決定的である。こうして、ここで、ヘーゲルは、生成を単純性と規定した後、単純性へ還帰していることとより精確に規定しなおしている。

(8) 胎児は人間の元来ではあるが自覚化ではない。

—Wenn der Embryo wohl *an sich* Mensch ist, so ist er es aber nicht *für sich*;

—胎児は、なるほど元来は人間であるにしても、自覚的にそうであるわけではない。

《註解》 無自覚的でありながら元来人間である胎児は、人間への生成反省によって自覚的人間となる。この人間と上記の単純性が重ねられているのであるから、単純性にも、無自覚的でありながら元来の場合と自覚的生成の場合とがあることになる。

(9) 単純性としての理性にも元来と自覚化がある。

für sich ist er es nur als gebildete Vernunft, die sich zu dem *gemacht* hat, was sie *an sich* ist.

理性が陶冶をうけて形成され、みずからを、元来あるところのものにしたときにこそ、人間は自覚して人間となる。

《註解》 ここでは、上記の人間の元来の単純性は、理性となり、それが、形成陶冶という生成によって自覚的理性となる。

(10) 理性の自覚的還帰が理性の現実化である。

Dies erst ist ihre Wirklichkeit.

こうなってはじめて理性は現実的なのである。

《註解》 理性の現実化とは、素質としての理性が自己を否定してから形成陶冶の媒介を経て自覚的に理性に還帰し単純化することである。

(11) 自覚されている自由が単純な直接性である。

Aber dies Resultat ist selbst einfache Unmittelbarkeit, denn es ist die selbstbewußte Freiheit, die in sich ruht und den Gegensatz nicht auf die Seite gebracht hat und ihn da liegen läßt, sondern mit ihm versöhnt ist.

2 sich] sich selbst

しかしこうした結果は、それ自身単純な直接性である。なぜなら、その結果は、自覚されている自由であり、みずからのうちに安らっているからである。そして、対立項を、そのままにしてわきに残しておくのではなく、対立項と和解しているからである。

《註解》 ここで注意すべきことは、自覚されている自由という人間理性の思惟規定が「単純な直接性」なのである。

《第22節》

【要旨】

理性は合目的働きである。しかし、最近では目的一般の形式は悪評である。アリストテレスの不動の動者も目的である。不動者は主体である。主体の力是对自存在である。結果も始めも内容は目的である。現実的なものとその概念には同一の根拠がある。現実的なものは、展開として現に存在する。この不安定が自己である。自己は自分に関係する同等性と単純性である。Subjekt は主体でもあり主語でもある。

(1) 理性は合目的働きである。

Das Gesagte kann auch so ausgedrückt werden, daß die Vernunft das *zweckmäßige Tun* ist. 上述のことを、理性は合目的な働きであるとも表現しうる。

《註解》 アリストテレスにあって存在のモデルは、自然（ピュシス）であり、その原因は、作用因であるよりも目的因である。

(2) しかし、最近では目的一般の形式は悪評である。

Die Erhebung der vermeinten Natur über das mißkannte Denken und zunächst die Verbannung der äußeren Zweckmäßigkeit hat die Form des *Zwecks* überhaupt in Mißkredit gebracht.

思考ということが誤解され、間違って考えられた自然が思考より上位とされたことのため、そして、さしあたり外的合目的性が追放されたことのため、目的一般の形式も悪評をこうむるようになった。

《註解》 思考ということが誤解されたというのは、思考が、自己の外の物の観察とされたことである。また、自然が間違って考えられたというのは、自然が目的原因ではなくて物とされたことである。この点については、『精神現象学』「理性」の章の「A 観察する理性」の箇所でこういわれている。「理性本能は、たしかに自己自身を、すなわち目的を見出し、しかもこの目的を物として見出しはする。しかし、第一に物が目的として現れてきているのに、この目的は理性本能にとっては物の外部にあり、そして、第二に目的としての目的も目的であると同時に対象的であるので意識としての自己のうちにではなくておのれの意識とはちがって他の悟性のうちにあることになる」(Phän. S.177)。また、「外的合目的性が追放された」とは、ここにあるように、目的が「意識としての自己のうちにではなくておのれの意識とはちがって他の悟性のうちにある」ことになったことである。ヘーゲルにとって、外的目的論は、内的目的論の前段階となるべきなのである。また、「目的としての目的」が「他の悟性のうちにある」という点については、カントの『判断力批判』ではこういわれている。「というのは、経験を導きの糸としてこうした対象を研究するだけのためにも、判断力にとっては原因と結果との目的論的連結が、そういう対象の可能のためにまったく不可欠であり、また、現象としての外的対象については、目的への

関係を含む十分な根拠はまったく見出されず、たとえそういう根拠が自然のうちに存しているとしても、自然の超感性的基体（この基体については一切の可能な洞察がわれわれにはまったく遮断されている）のうちに求められねばならない、とすれば、目的結合に対する説明根拠を自然自身から汲みとるということは、われわれにとって断じて不可能なことであって、こうした合目的性の最高の根拠を、世界因としての或る根源的悟性のうちに求めることは、人間の認識能力の性質上必然的なことだからである」（I. Kant, *Kritik der Urteilkraft*. § 77）。

(3) アリストテレスの不動の動者も目的である。

Allein, wie auch *Aristoteles* die Natur als das zweckmäßige Tun bestimmt, der Zweck ist das Unmittelbare, *Ruhende*, das Unbewegte, welches *selbst bewegend* ist;

2 Unmittelbare, *Ruhende*, das Unbewegte, welches *selbst bewegend* ist;] Unmittelbare, das ... ist

しかしながら、アリストテレスも自然を合目的な活動として規定しているように、目的というものは、直接的で、静止していて、動かされないでいながら、それ自身は動かすものである。

《註解》ヘーゲルのアリストテレス理解の特質は、思考の思考の見地あるいは観想の見地が、『靈魂論』のヌース（理性）の見地と一体のものと解釈されていることである。そして、その一体化は、不動の動者の導入によってなされており、当該箇所は、そのことを端的に示している。ヘーゲルは、『精神現象学』初版では、こう書いている。「Allein, wie auch *Aristoteles* die Natur als das zweckmäßige Tun bestimmt, der Zweck ist das Unmittelbare, das *Ruhende*, welches *selbst bewegend* oder Subjekt ist.“（*Phän.* S. 16f.）ここでは、アリストテレスの目的論とヘーゲルの否定性との関係は示されているが、不動の動者と否定性との関係は、はっきりとは示されていない。そこで、ヘーゲルは、上記のように書き換えた。ここでは、不動のものが明示され、それと否定性との関係も明らかである。しかも、初版では、主体は、*bewegend* と等置されているかのようであったのを、ヘーゲルは、訂正して、不動の動者と等置したわけである。主体は、目的論的には、不動の動者であり、それが他のものを動かす力を持っているという点から見ると、純粋な否定性なのである。しかも、他のものとは他者的存在という自己の分身なのであるから、他のものを動かすとは、自己の力で自己を動かし、自己運動することにもなるのである。この点については、啓示宗教の箇所では「自己運動するものは精神であり、精神は、運動の主体であり、それと同様に動かす働き自身あるいは、主体がそれを通り抜ける実体である」（513）といわれている。つまり、動かす働きと動かされることという区別が成立するとき、そして、その動かされることが、動かす働きにとって他者的存在というかたちをとるときには、動かす働きが実体となる。しかし、精神という点から見ると、自己が自己を動かしているのである。これが「精神が運動の主体である」ことの意味である。このようにして、『精神現象学』第2版のための訂正では、アリストテレスの不動の動者との対応がひじょうに明らかである。自己運動の問題に内在することなく主体そして絶対知の問題を理解することはできない。

(4) 不動者は主体である。

so ist es *Subjekt*.

1 第2版追記

すなわち、それは主体なのである。

《註解》「それ」は、「動かされないでいながら、それ自身は動かすもの」を指していて、主体は、動かすが動かされないものなのである。ただし、自己とは異なるものを動かす不動者のように見えているうちは、実体であるが、その異なるものが自己であることが明らかになったとき、その実体は、自己を動かす不動者としての主体となる。

(5) 主体の力は対自存在である。

Seine Kraft, zu bewegen, abstrakt genommen, ist das *Fürsichsein* oder die reine Negativität.

1 Seine Kraft, zu bewegen, abstrakt genommen, ist] 第2版追記

その動かす力を、それだけとして抽象化すると、対自存在〔自分に対してあるということ〕であり、純粋な否定性である。

《註解》ここで、主体の動かす力の抽象化を「対自存在」あるいは「純粋な否定性」と説明している。不動者としての主体は単純状態であるが、その自己を否定して他者とする力を主体自身が持っているから、それを「純粋な否定性」と抽象化している。したがって、『精神現象学』における主体の動かす力とは、『論理学』「存在論」段階の思惟規定としては、対自存在とされ、『論理学』「本質論」段階の思惟規定としては、純粋否定性と呼ばれる。

(6) 結果も始めも内容は目的である。

Das Resultat ist nur darum dasselbe, was der Anfang, weil der *Anfang Zweck* ist;

1 *Anfang Zweck*] Anfang Zweck

— 結果がはじめのものと同一のものであるのは、はじめが目的だからである。

《註解》 こうして、否定の否定としての自己還帰は、実現された目的となる。

(7) 現実的なものとその概念には同一の根拠がある。

— oder das Wirkliche ist nur darum dasselbe, was sein Begriff, weil das Unmittelbare als Zweck das Selbst oder die reine Wirklichkeit in ihm selbst hat.

このことをいいかえれば、現実的なものがその概念と同一のものであるのは、目的としての直接的なものが、自己つまり純粋現実態をそれ自身のなかにもっているからにほかならない。

《註解》 ここから、現実的なものの概念とは、自己と呼ばれ、アリストテレスの用語でいえば、エンテレケイアつまり「純粋現実態」であることが判明する。ここで、純粋とは、概念の直接状態と実現状態という形式上の違いにかかわらず内容として同一であることを意味している。自己とは、ギリシア

語のアウトスのドイツ語訳であり、単純な自身ということと同等性を含意している。

(8) 現実的なものは、展開として現に存在する。

Der ausgeführte Zweck oder das daseiende Wirkliche ist Bewegung und entfaltetes Werden;
1 ist Bewegung und entfaltetes] ist die ... entfaltete

実現される目的、あるいは現に存在する現実的なものは、運動であり、展開される生成である。

《註解》「現に存在する現実的なもの」は、「目的としての直接的なもの」と対になっている。そして、両者に共通するのが「純粹現実態」ないし自己である。

(9) この不安定が自己である。

eben diese Unruhe aber ist das Selbst; und jener Unmittelbarkeit und Einfachheit des Anfangs ist es darum gleich, weil es das Resultat, das in sich Zurückgekehrte,

しかし、まさにこの不安定こそ、自己なのである。しかもこの自己が、はじめのもつあの直接性と単純性と同じであるのは、自己が結果であり、自分のうちにふたたび還帰したものであるからにほかならない。

《註解》自己は、伝統的には実体であるが、それが展開の運動であるがゆえに不安定なのである。こうして、実体が自己となったとき、主体となる。その際に、運動は、もともと自己へと展開する自己還帰となる。

(10) 自己は自分に関係する同等性と単純性である。

—das in sich Zurückgekehrte aber eben das Selbst und das Selbst die sich auf sich beziehende Gleichheit und Einfachheit ist.

実際、自分のうちに還帰したものであってこそ自己である。このかぎり、自己とは、自分自身に関係するところの同等性と単純性である。

《註解》すでに《第17節》註解で、主体の意味についてつぎのように説明されていた。

(a) ヘーゲルのいう主体とは、第一義的には、実体自己を動かす原動力としての自己である。その際、自己運動は、動かされる自己が実体という他者的対象であるかのような仮象を否定する。したがって、自己とは、動かされる円周運動が動かす中心軸へと還帰して不動の円環となる。また、そのかぎり、この自己は、円周運動の原動力としての不動の中心ともなり主体と表現される。

(b) ところで、この原動力が、否定性とされるのは、自己運動の中心動力そのものが分裂して円運動となるからである。そして、それは、自己が自己を動かすためには、最初の自己つまり純粹現実態が、自らの単一性を、否定し、動かす自己と動かされる自己に分裂しなければならない。この分裂する力が「悟性の労苦の働き」(Phän. S. 25)であり、この分裂にとどまることが「否定的なものを存在に転換する魔力」(Phän. S. 26)とされる。

(c) この自己分裂運動は、つぎに、分裂状態の自己を否定し、単一な自己へ還帰する。この分裂還帰の全体が推理媒介である。したがって、自己還帰としての推理は、「自己を動かし、自己自身と同等になること」(*Phän.* S. 17) である。そのような「自己とは、自分自身に関係するところの同等にして単純性」(*ibd.*) にほかならない。そして、当該序説では、この自己こそが哲学体系としての主体でもあるということになる。

引用文献略号

- GW*: Georg Wilhelm Hegel, *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*. Hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff. (*GW* の後に巻数と頁数を記してある)
- W*: Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Werke in zwanzig Bänden. Auf der Grundlage der Werke von 1832–1845 neu editierte Ausgabe*. Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 1969–1979. (*W* の後に巻数と頁数を記してある)
- Phän.*: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.
- AA*: *Historische-kritische Schelling-Ausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*. Hrsg. v. H. Buchner, W. G. Jacobs und A. Pieper, Fromman-Holzboog, Stuttgart, 1975ff.
- SW*: F. W. J. Schellings *sämtliche Werke*. Hrsg. v. K. F.A. Schelling, J. G. Cotta, Stuttgart/Augsburg, 1856ff.